

り本を買われぬということ。これは危機感を感じますね。特に、若い先生方には、もっと意欲を持っていただきたいと思っています。

さらに、「研修時間の確保」が大きな問題となっています。短い時間で深まりのある研究をするにはどうしたらよいかということですね。

佐久間 水野所長さん、高等学校の校内研修の現状はどうでしょう。

水野 高等学校の場合は、校内研修を現在抱えている教育課題解決のための研修ととらえています。大所帯での校内研修となると、共通理解や時間の設定などで難しい状況にあります。

私が若い頃などは、教科の専門性という特質から、校内研修というと、教科の指導法の研修、あるいは教科の指導を通して生徒の人間性を育てることに意味があるという、どちらかというとなんな傾向にありました。

今後は、各学校の教育課題を的確に把握し、全教職員の共通理解を図り、生徒の学力向上や人間性の望ましい育成のために努力するとともに、一人一人の教職員の指導力の向上のための研修の充実に努めていくことが大切だと思います。

佐久間 県教育委員会の立場からはいかがですか？

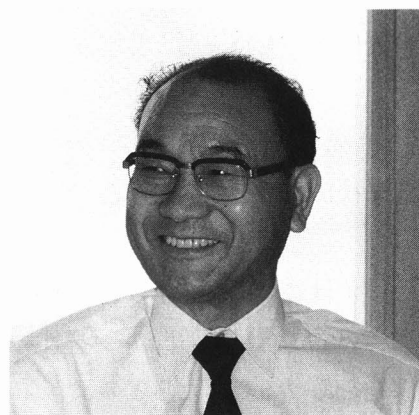
高原 先生方には、「校内研修は自分自身の教育力を高めるもの」という認識を持って欲しいということです。変化の激しい社会の中で生きる児童生徒の教育を行うためには、何を勉強しなければならないか各自がしっかりと決めることが大切でしょう。

県教育委員会としては、平成5年度に研修の体系を組み替えて、先生方のためになる研修を組んでいけるよう改善しましたが、今後も内容を充実させるための検討を行ってまいります。

また、「校内研修そのものの考え方」を吟味し、先生方の個性を伸ばし、教育力を高める工夫をしていってほしいと思います。

たとえば形式にとらわれぬで、先生方が研修したいことを思う存分やれるようにするにはどうするかを、もっと積極的に考えたいものです。

佐久間 庄司先生は、多くの学校の校内研修の取り組みをご覧になって、どのような感想をお持ちですか。



庄司他人男先生

庄司 校内研究に焦点を当ててお話ししたいと思います。

わたしは、もう少し研究を“楽しむ”というファクターを取り入れ、研修することのメリットを直接に感じ取れるような工夫があってもいいのではないかと考えています。

また、形式はある程度踏まえても、あまり硬く考えすぎないで、先生方の個性ないし持ち味を生かす方向で考えていいのではないのでしょうか。

もう一点ですが、もっと他校の研究成果を活用し合うようにできないものかと思っています。

研究校同士の相互交流がさらに図られるよう